

農家の若造が拓く 遊休農地の未来

内子町の山あいには響き渡るトラクターのエンジン音。そこには畑を耕す若いしらの姿があります。ここはかつて葉タバコ畑として栄えた農地でしたが、後継者がいなくなり長年、手つかずの遊休農地でした。

少子高齢化や農業の担い手不足により、増え続ける遊休農地は、まちにとって大きな課題です。そんな中、「自分たちのふるさとを守りたい」と立ち上がった若いしらがあります。「内子町青年農業者協議会」（通称、農家の若造）の皆さんです。

今回の特集では農業の担い手として、地域の担い手として、奮闘する彼らの姿と思いに迫ります。



地域への思いと 農業への情熱が 畑を耕す原動力

遊休農地を蘇らせる 農家の“若いし”ら

草刈り機やチェーンソーを手に畑で作業するのは農家の若造の皆さんです。町内で農業をする20〜40代の若者で結成されたグループで、遊休農地を再生し、次世代につなぐ活動「遊休農地再生プロジェクト」を3年前から行っています。現在、メンバーは12人。野菜や果樹栽培、畜産などをする農家が集まっていて、それぞれが忙しい合間を縫って活動しています。

地域の課題に直面

プロジェクトを始めたきっかけは、内子町の農家数と経営耕地面積の推移を、農家の若造で独自に調べたことです。2005〜2020年までの15年間で農家数は約750戸も減少し、経営耕地面積は約600㍏も減少していることが分か

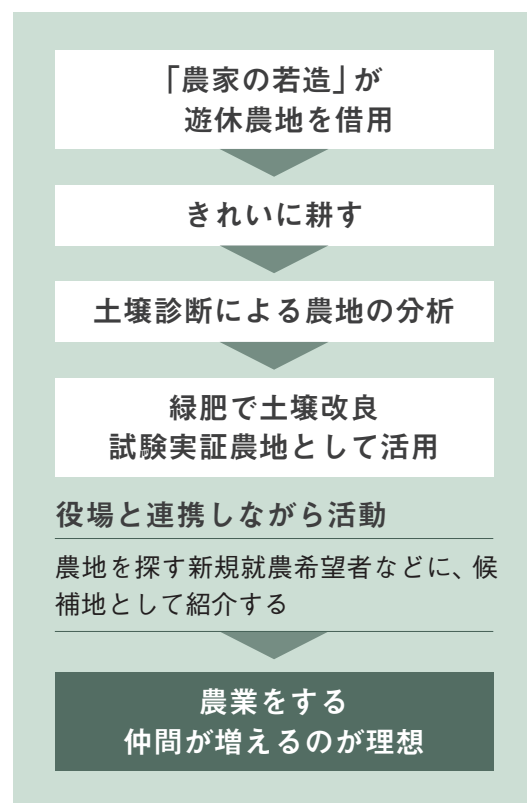
りました。この減少率をもとに計算すると、2030年には農家数が約1070戸、経営耕地面積は約600㍏にまで減ると予測されます。遊休農地が増えると、ふるさとの景観の悪化や鳥獣被害の増加、就農の妨げにもなります。まちの課題に直面し、危機感を抱いたメンバーは「自分たちに何かできないか」と立ち上がったのです。

新規就農者へバトンをつなぐ

活動では、まず農家の若造で遊休農地を借用。草刈りをして、畑本来の姿に戻します。きれいにしても耕作者がいなければ、またすぐに遊休農地へと逆戻り。考えたのが、役場と連携し、新規就農希望者へ農地を紹介することです。会長の上岡雄介さんは、「遊休農地を一から耕すのは大変で、個人でやると時間もお金もかかる。すぐに耕作できる農地があれば、就農しやすい。一緒に農業をする仲間が増えるのが理想」と目を輝かせます。遊休農地再生プロジェクトは、農業への情熱と地域を思う農家の若造たちの優しさから始まりました。

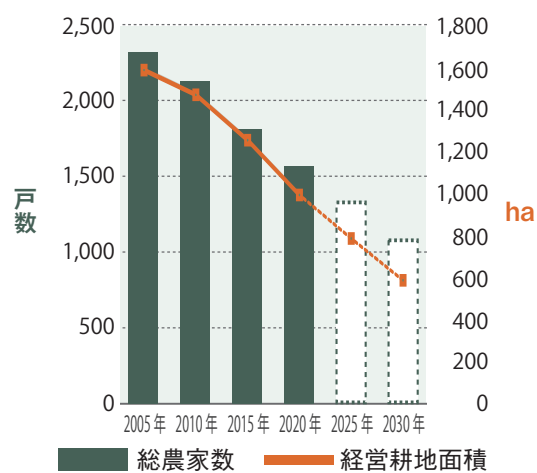
check! 1

遊休農地再生プロジェクトの流れ



check! 2

内子町の農家数と経営耕地面積の推移



※農家の若造調べ



10月21日の作業に参加した「農家の若造」の皆さん

(右から) 鷹野友紀さん、酒井優寛さん、三浦裕太郎さん、尾形祐輔さん、曾根航也さん(農村支援センター職員)



1_夏場はみんなで草引き 2_大きく育ったサツマイモ 3_掘る前はドキドキ 4_笑顔で握手するメンバーと大木さん(右) 5_金時、シルクスイート、紅あずま、紅はるかの4種類を植え、全部で124*を収穫 6,7_まつやま産業まつりでは、焼き芋にして試食してもらった。味の好みなども調査

たくさんの芋を収穫できて喜ぶメンバー。この日は大洲農業指導班の職員も手伝ってくれ、にぎやかに作業

耕すだけじゃ面白くない。 仲間と学んで、楽しんで 遊休農地の可能性を広げたい

遊休農地をただきれいにするだけでなく、さまざまな活用で可能性を広げようとしています。やりがいや楽しさなど、どんな思いで活動しているのか、メンバーの二人に話を聞きました。

地域にも自分たちにも
有意義な活動

「立派な芋がなつとる」「見て、こっちにも」——。流れる汗をぬぐいながら、和やかに作業をする農家の若造の皆さん。取材した9月30日は、内子地区にある広さ10[㍓]ほどの

畑でサツマイモの収穫をしていました。長年ここは遊休農地で、昨年の春から畑の再生を進めてきました。プロジェクトを始めた頃、メンバーの一人から「農地をただきれいにするだけじゃつまらない。農業を学び、楽しめる、地域にも自分たちにとっても有意義な活動にしたい」という声が上ががり、すぐに全員が賛同。今回は痩せた畑でも実りやすいサツマイモ作りに挑戦しました。収穫後は「えひめ・まつやま産業まつり」で試食販売を実施。芋は完売の大盛況で、多くのお客さんから感想を直にもらいました。やりがいとともに、遊休農地は生かし方次第で可能性が広がることを感じたメンバーは、「地元事業者との商品開発も面白そう」「農業でまちを盛り上げたい」とアイデアや地域への思いも膨らんでいます。

芋を収穫した日、もう一つメンバーにとってうれしい出来事がありました。1年かけて再生してきたこの農地が、新規就農者につながったのです。農家を夢みて、県外から移住した大木積^{あき}さんがここで野菜作りを始めます。「理想が現実になり驚いている。頑張ったかいがあった。何より農業をする仲間が増えてうれしい」と笑顔を見せるメンバーたち。握手をして、みんなで大木さんを歓迎しました。

助けられたから、今度は自分が力になりたい

Interview

このまちの良さは新規就農者を応援し、かわいがってくれる土壤があることです。神奈川県から移住して2年ほど経った頃、やっとの思いで借りた農地は、地面が見えないほど草や雑木で覆われていました。困っていると農家の若造や地域の人たちが、重機や草刈り機を持ち寄って、駆けつけてくれたのを覚えています。

9年目の今では当時の3.5倍の2[㍓]にまで農園を広げられ、キウイやイチジクなど、栽培する果物の生産量や出荷量も年々伸ばせています。今こうして頑張れているのは、あの時みんなに助けられたから——。

一から開拓する大変さを身をもって知ったから、同じ境遇の人たちの力になりたい、まちの人の温かさに支えられたから、地域の役に立ちたいと思っています。

私は内子町ののどかな自然と優しい住民たちが好きです。この風景と地域がいつまでも続いてほしい——。そのためには農業をする人たちを増やす必要があります。農業はきつくてしんどいイメージがあるかもしれないけれど、すてきな部分がたくさんあります。農業は「かっこよくて、感動できて、稼げる」そんな魅力や成功体験も僕たち農家の若造から伝えていきたいです。

仲間との活動が楽しみでやりがい

Interview

農家の若造に入ったのは6年前。ブドウ農家になるためにふるさとへ帰ってきた頃でした。メンバーは僕より年上で、頼りになる先輩たちばかりです。活動ではみんなとの交流が何よりの楽しみ。農園では一人でブドウの世話をしているので、仲間とわいわい作業をしているとパワーをもらえるんです。この間の芋掘りも楽しかったです。2種類の植え方で実の付き具合を調べたり、試食販売でお客さんから芋の味の好みを聞いたり、勉強にもなりました。みんな真面目で熱心だから、集まるといろいろな情報交換ができるのもいいですね。活動で得た知

識や活力を自分の園に持ち帰ることで、「よし、やるぞ」とブドウ作りへのモチベーションを上げられています。

プロジェクトで再生する遊休農地は、長年手入れができなかった畑が多く、作業はとても大変です。でも、きれいになった景色を見ると気持ちが良くて、達成感があります。自分たちで一から耕した農地は愛着も湧いてきます。これまでに2カ所の遊休農地を耕し、花の種をまき、作物を収穫してきました。今回は販売もでき、年々やりがいが増しています。次はみんなとどんな景色が見られるのかと、今から楽しみにしています。



ともき
鷹野 友紀さん(33)
=富中=



たつき
山岡 樹さん(29)
=上宿間=

つないでくれて、ありがとう—— 生き返った畑は 誰かの夢であり、喜び

遊休農地再生プロジェクトは、農地を貸したい人と必要とする人をつなぐ役割もしています。農地を貸した人、借りた人たちに話を聞くと、この活動のありがたさが伝わってきます。

ここから歩み出す 夢の農家への道——

大木 積さん(58) 〓 谷 〓



「田舎で農業をしたい」という夢をかなえるため、サラリーマンを辞めて内子町へ引っ越ししてきました。新規就農者研修滞在施設に空きがあり、50代の私でも受け入れてくれたことが移住の決め手です。経験も、農地も、知人もない、ゼロから挑戦する私を、たくさんの人が支えてくれました。農家の若造の皆さんにも支えられ、メンバーの一人・三浦裕太郎さんのもとで野菜作りを学びながら、少しずつ技術を習得しました。一番苦労したのは農地探しです。

農地を見つけても、地主さんに断られることが多く、思い入れのある土地を借りるには信頼関係がないと難しいです。現地へ行くと草木で荒れていて、自力では開拓できないと諦めたことも——。だからこそ、皆さんがつないでくれた農地のありがたさを感じます。農業をしたいと思いつけてきたから、この農地は私にとっては夢舞台。皆さんにスタートラインに立たせてもらった気持ちです。体力が持つか、生計が立つのか、不安もあるけれど、ここから頑張りたいです。

三浦さんは今でも相談に乗ってくれていて、心強いです。私はずっとこのまちで、畑を耕しながら生きていきたい。農業でも地域でもしっかりと根を張れるよう、一歩ずつ前に進みたいです。まずは「おいしいから食べて」と胸を張って言える野菜を作るのが目標です。



農家の若造のみんなと芋堀り



三浦さんに野菜作りを学ぶ



つないでもらった農地



始めて自分で作った小松菜



畑だけでなく 心まで晴れやかに

福山 勇さん(68) 〓 大岡 〓

農家の若造の皆さんにきれいにしてもらったのは、広さ50^アほどの農地です。父が農地拡大のために購入した畑で、以前は地域の基幹産業だった葉タバコが栽培されていました。でも7年前に作り手がいなくなっただけで、ずっと手つか



雑木で隠れていた眺望



ジャガイモを収穫する三浦さん



定年退職後は小さな畑で、妻の紀子さんと、栗やミカンで自分たちのペースで栽培

ずのままでした。代わりに農業をしようにも農地が広すぎて、高齢の私には耕すことはできません。草で覆われていく畑を見るのは心苦しく、せめて手の届く範囲くらいはと、妻と草引きをしていました。自然の力には勝てませんでしたが、農家の若造の皆さんに「プロジェクトのために畑を貸してほしい」と声をかけてもらった時は迷わずお願いしました。中には顔見知りの子もいて安心して任せられました。作業は10人がかりで5日はか

かったと思います。おかげで見違えるほどきれいになり、心まで晴れやかな気持ちになりました。いくら若くても、体にこたえたはず。感謝の気持ちでいっぱいです。畑では今、三浦さんがジャガイモを育てています。子どもたちは町外で暮らしていて、畑を継ぐ予定はありません。でも、いつかは誰かがこの農地を継いでくれたらいいと思っていたから、使ってくれるのがとてもうれしいです。畑を見るのも楽しみになりました。

Before & After

福山さんが所有する 遊休農地が再生するまで



畑とは分からないほどカヤが生い茂り、前が全く見えない状態



緑肥でまいたマリーゴールドの花が咲き、美しい景観が広がる



トラクターできれいに耕し、ジャガイモ畑へと変化した農地

お知らせ Information



遊休農地の相談をお待ちしています

耕作できなくなった農地を、貸したり売ったりすることに関心はありませんか。手入れの行き届かなくなった農地は景観の悪化だけでなく、鳥獣被害の増加にもつながります。農地を必要とする人につなぎ、大切に使うことが地域の元気にもつながるかもしれません。情報だけでもいいので、農業委員会や農業委員、農地利用最適化推進委員までご相談ください。

【問い合わせ】 農業委員会 ☎0893(44)2113



畑を耕した後は畝を作り、みんな協力してサツマイモを植えた



緑肥でまいた種がぐんぐん成長。夏にはきれいなヒマワリ畑に——



畑の周りには雑木も生えていて一つ一つ、手作業でのけていく

大木さんにつながった 遊休農地が再生するまで

Before & After

耕して、守る。いつかまた、「誰か」につながると信じて――

まちの未来を思ったとき、
何もしないという選択肢はなかった
農業の担い手として、
地域の担い手として、
かけがえのない
ふるさとを守りたい――

地域を、農業を守りたい

小さい頃から、石畳地区で葉タバコ農家をしていた祖父の農作業を手伝うのが好きで、いつか自分も農家になりたいと思うようになりました。就農したのは27歳の時。農業ができなくなった祖父に代わり、受け継ぐことを決心。二人が一生懸命守ってきた農地だから、途切れさせたくないと思いました。受け継いだ農地ではキュウリやキャベツ、カボチャなどを育てています。

農業者の多くは、私の祖父のように年配の人たちです。10年後、20年後、今農業をする60〜80代の人たちが引退すると、さらにまちの遊休農地が増え、急激に地域が廃れてしまうんじゃないかと

心配しています。先輩たちが元気づけられ、農地を引き継ぐ仕組みをつくらなければ、地域の食や景観を守り続けるのは難しいかもしれません。今が踏ん張り時だと思っています。

プロジェクトで再生できる農地は年に1カ所ほどで、私たちの活動は小さなことかもしれませんが、でも遊休農地をきれいにした後、景色が明るくなって、地域が活気づいた」「使ってくれてありがとう」と言われることもあり、やって良かったと励みになっています。

可能性を信じて、種をまく

内子町には農業をしたいと町外から移住する人たちも多いです。地域になじめるよう、今後も続



内子町青年農業者協議会前会長

三浦 裕太郎さん (38)
=石畳9=

けられるよう、農家の若造でもサポートしていきたいです。再生した遊休農地でできた作物の商品開発や、地元事業者とのコラボなど、メンバーから出たアイデアもいくつか実現できたいですね。私たちの活動や農業の楽しさを、より多くの人に知ってもらう場を増やすことで、農業をする仲間や、プロジェクトに参加してくれる人も増えるとうれしいです。

今は継ぐ人がいなくても、私たちが耕し、守っていたら、いつかバトンを渡すことができるかもしれない。まだ見ぬ誰かにつながることを信じて、農業の可能性を信じて、これからも仲間と一緒にふるさとをつなぐ種をまいていきたいです。

農地を耕せなくても、応援することはできる

農家の若造の皆さんの取り組みを見てみると、ふるさとの農村風景はここで農業をしている人たちがいるからこそ、続いているのだと気付かれます。三浦さんが話すようにこの活動は、増え続ける遊休農地に比べれば、小さなことかもしれませんが、でもメンバーが再生した農地は、大木さんにとっては夢の舞台であり、福山さんにとっては喜びであり、地域の人たちには活力になっていて、人々の心には大きな力になっていることが分かりました。また内子町には農業を始めようとする人たちの背中を押してくれる人たちがたくさんいることも知りました。応援してくれる人たちも、ふるさとを守る仲間の一員だと思っています。直接、畑を耕せなくても、応援することはできます。これからの地域や農業に目を向けてくれる人が増えれば、未来はいい方向に向かっていくのではないのでしょうか。

小さなことかもしれないけれど、
解決の糸口にきつとなる――

